



Title	『海国図志』版問題続考：新たな版区別の発見と諸版間の継承関係
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要. 2024, 1, p. 219-233
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94805
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『海国図志』 版問題続考

——新たな版区別の発見と諸版間の継承関係——

The Revision History of *Haiguo Tuzhi* Revisited:
Versions of the Sixty-Volume Edition and Related Issues

田野村 忠 温

1 はじめに

筆者は先に拙論「『海国図志』版問題新論—従来未知の版区別の発見とその含意—」（『大阪大学大学院文学研究科紀要』第63巻、2023年）——以後、「前稿」とする——において、魏源の世界地理著作『海国図志』の50巻本にも100巻本にも学界の定説に反して複数の版が存在することを明らかにするとともに、同書の改版過程における諸版の相対的な先後関係を推定した。

前稿においては、その準備が特殊な社会状況の時期に重なったために資料調査上の制約が大きく、すでに2つの版の存在が知られている『海国図志』60巻本は考察の対象外とした。この小論では、前稿と同様の方法を用いて60巻本にも未知の版区別があることを明らかにし、また、その発見が新たに提起する諸版間の継承関係に関わる問題に考察を加える。

なお、前稿と同じく本小論においても考察の主たる対象とするのは『海国図志』の「本来版」、すなわち、魏源の生前に出版された諸版である。魏源没後に出版された多数の「重刊版」については、後の節でその版問題の複雑な様相の一端を確かめるにとどめる。

2 『海国図志』60巻本

従来、『海国図志』の60巻本には2種類の版、すなわち、1847（道光27）年に出版された原刊版とその2年後の1849（道光29）年に出版された修訂版とが存在すると考えられてきた。各版の扉の見返しにはそれぞれ「道光丁未仲夏古微堂鏤板」「道光巳酉夏古微堂重訂」と書かれている。

2.1 60巻本の3つの版

しかし、筆者のこのたびの調査によれば、60巻本には少なくとも3種類の版——原刊版、

修訂版1、修訂版2——がある。どこにある60巻本が3版のそれぞれに該当するかを表1に示す。「京都大学人文科学研究所蔵本」は正確には「京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター¹蔵本」である。

表1 『海国図志』60巻本の3版²

	確認した本
60巻本原刊版	鹿児島大学附属図書館蔵本
	東洋文庫蔵本
	萩市立萩図書館蔵本
	成文出版社刊影印本(1967年)
60巻本修訂版1	九州大学附属図書館蔵本
	京都大学経済学研究科・経済学部図書室蔵本
	京都大学文学研究科図書館蔵本
	国立公文書館蔵本
	上海図書館蔵本
	東京都立中央図書館蔵本
	ベルリン州立図書館蔵本
	山口大学附属図書館蔵本
60巻本修訂版2	京都大学人文科学研究所蔵本
	湖南図書館蔵本

修訂版1と修訂版2の2つが従来修訂版と考えられてきたものに該当する。両者の区別が長年気付かれることがなかった原因は、50巻本と100巻本の場合と同じく、調査の不足、皮相な観察、定説の轻信にある。そして、その背後には序文や見返しにおける刊記に対する過信がある。すなわち、“版の異同は序文や見返しの刊記に基づいて判断できる”、“刊記が同じであれば版も同じである”という素朴な思い込みである。60巻の修訂版1と修訂版2においても刊記の内容は完全に同一である。

『海国図志』60巻本の3版の扉を図1に示す。

修訂版2の扉は修訂版1の扉を忠実に再現しているが、よく見ると小さな差があることが分かる。例えば、「國」の国構えと「或」の下端が修訂版1では離れ、修訂版2ではつながっている。また、「志」の最後の2画が修訂版1ではつながり、修訂版2では分かれている。扉のみならず、見返しにおいても確認の限りのすべての本文の葉においても筆跡の差が認められ、両者が相異なる木版を使って印刷されていることが知られる。³

修訂版2の残存は少ないようである。筆者の確認の範囲には京都大学人文科学研究所蔵本

¹ 旧称東アジア人文情報学研究センター。

² 60巻本原刊版の成文出版社刊影印本がどこの蔵本に基づいているかは不明である。

³ 本文の字形については、序文（『海国図志叙』）、目次（『海国図志総目』）、巻一の前半のほか、残る59巻のうち半数巻の各開始葉を用いて確認した。

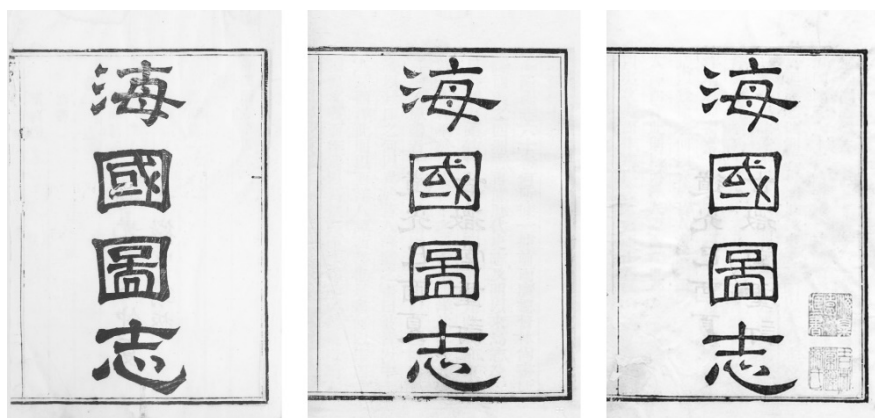


図1 『海国図志』60巻本3版の扉——原刊版（左）、修訂版1（中）、修訂版2（右）⁴

と湖南図書館蔵本しかない。⁵ しかし、そのことのために従来修訂版1と修訂版2の区別が気付かれなかったわけではない。京都大学人文科学研究所蔵本はその扉、見返し、巻一の開始頁の画像が同研究所のWebサイトで公開されており、また、湖南図書館蔵本も扉の写真が雑誌に掲載されており、いずれも現物を実見しなくても確認することができるからである。単に、誰もが『海国図志』の版の種類に関する定説を信用し、それを検証しようとする者がなかったということに過ぎない。

2.2 60巻本修訂版2版の関係(1)——60巻本3版の比較

2つの修訂版を上でかりに修訂版1、修訂版2と名付けたが、実のところ両版の新旧の関係は不透明である。以下に狭い範囲の調査に基づく仮説としての私見を述べる。

まず、60巻本の原刊版、修訂版1、修訂版2の3つの版において正字と誤字の対応が見られる事例を確かめてみると、その多くは表2に例示するA1～B2の2種4類に分けることができる。以後、誤字は本文では「軀逐」のように加点によって示すが、表中ではそれがむずかしいので太字で代用する。葉数は第1葉表を1a、第23葉裏を23bのように書く。⁶

⁴ 原刊版は萩市立萩図書館蔵本、修訂版1はベルリン州立図書館蔵本、修訂版2は京都大学人文科学研究所蔵本による。

⁵ 湖南図書館蔵本が修訂版2であることは、『文史拾遺』1994年第2期「紀念魏源誕辰200周年專輯」（湖南省文史研究館）の表紙および裏表紙の裏面に掲載された扉の写真によって判断した。同本の本文は確認できていない。

⁶ この調査には塩谷世弘と箕作阮甫による付訓本『海国図志 籌海篇』（1854（嘉永7）年）、『海国図志 英吉利国部』（1855（安政2）年）、『海国図志 魯西亜州部』（1855（安政2）年）およびそれらの編集に用いられたと見られる国立公文書館蔵の『海国図志』60巻本を利用した。以上の諸本では『海国図志』原本において誤記の疑われる箇所とその旨の注記、書き込みがあり、誤字を効率的に探することができる。

表2 『海国図志』60 巻本3版における文字の正誤の対応

	巻	葉	行	原刊版	修訂版1	修訂版2	備考(出現文脈、意味など)
A1	1	36b	7	駆逐	軀逐		
	34	13b	2～3	奸宄	奸究		「奸宄(かんき)」は“悪者、くせ者”
		20a	1～2	約束	約束		
	35	31b	3	久	人		「(小呂宋)久為英吉利所擲」
	36	17b	5	三千三百五十八	三十三百五十八		
	38	17a	7	敵盟誓死	挿盟誓死		「敵(そう)盟」は“いけにえの血をすすって盟約を結ぶ”
17b		6	英軍	英車		「英軍排艦開砲攻之」	
A2	1	20b	8	湖中	湖申	湖中	「岳王湖中之水攻水戦」
		57b	9	公司	公其	公司	
	12	8a	2	復東	後東	復東	「不復東」(東に帰ることはしなかった)
	35	7b	4	回帆徑去	回軌徑去	回帆徑去	
		9b	7	而	面	而	接続詞
	36	12a	6	多冰雪	多氷雲	多冰雪	
			7	道光九年	道光力年	道光九年	
		18b	8	土番	土悉	土番	
		21a	4	七千五百	七千五而	七千五百	
		24a	7	改用	改男	改用	
		30a	5	恐生内患	殺生内患	恐生内患	“内憂の発生を恐れる”
	38	6	即裏海	海裏海	即裏海	「加斯比庵海」(カスピ海)の解説	
13a		5	西北界	面北界	西北界	「東界～、南界～、西北界～」	
19a		7	嶼上	與上	嶼上	「嶼」は実際には「山」が「與」の上に置かれた字形	
B1	35	1a	8	欧φ巴			「欧羅巴」の脱字
	37	4b	9	奴匈			「匈奴」の2字転置
B2	1	37b	2～3	荷蘭西		仏蘭西	
	34	17b	6	為土		為上	「農以稼穡為上」(農は耕作を第一とする)
			8	聞看		開看	「封貯定期開看」(密封保存し、時を定めて開いて見る)

表2においてA1、A2の類としているのは、60巻本の3版における表記がそれぞれ正字 - 誤字 - 誤字、正字 - 誤字 - 正字という関係にある事例である。すなわち、両類は原刊版での正字が修訂版1で誤字に変わったという点で共通し、それが修訂版2で正字に訂正されたかどうかに関して異なっている。

B1、B2類は3版における表記がそれぞれ誤字 - 誤字 - 誤字、誤字 - 誤字 - 正字という関係にある事例である。すなわち、両類は原刊版、修訂版1ともに誤字である点で共通し、それが修訂版2で正字に訂正されたかどうかに関して異なっている。ちなみに、表に示したB1、B2の類の例の多くは50巻本での誤字を引き継いだものである。

修訂版1と修訂版2の新旧を考えるのに使える可能性があるのは、両版に文字の違いのあるA2、B2の類の事例である。A1、B1の類の事例においては両版のあいだに違いがないので、考察に役立たない。

文字の正誤の対応に似た関係が傍点の有無に関しても見られる。『海国図志』50巻本では

傍点の類は使われていないが、60 巻本と 100 巻本では一部の文字の右下（ないし右横）に傍点「・」が書かれ、表現の切れ目もしくは強調を示している。表現の切れ目を示す傍点は現代の句読点に相当するが、強調を示す傍点も目下の分析にとってはそれと共通であるので、ここでは両用途の傍点を区別することなく扱う。

60 巻本の 3 版において傍点の有無の対応の見られる事例を巻一冒頭の数葉の各文字について確かめてみた結果の一部を表 3 に示す。表中に言う「高さ」は当該の字が行内の上から数えて何字目にあるかを意味する。例えば表の最初の行は巻一第 2 葉裏の 1 行目、上から数えて 21 字目の位置にある「其」の字に関わる傍点の有無の状況を示している。

表 3 『海国図志』60 巻本 3 版における傍点の有無の対応

	巻	葉	行	高さ	文字	原刊版	修訂版1	修訂版2
A1		2b	1	21	其	有	無	
		5a	7	7	前			
		5b	2	13~14	棄定			
A2	1	1a	5	2	戦	有	無	有
				8	者			
		2a	2	2	港			
			9	14	艘			
		4a	4	20	里			
		5a	3	2	戸			

表 3 における A1 と A2 の各類は表 2 のそれと平行的な関係にある。すなわち、両類は原刊版にあった傍点が修訂版1で脱落したという点で共通し、修訂版2でそれが復活させられたかどうかに関して異なっている。

しかし、以上の確認に基づいて 2 つの修訂版の新旧を知ることはできない。2 つの修訂版の関係が逆であると考えても何ら不都合はないからである。例えば、表 2 と表 3 の A2 類について言えば、原刊版の正字ないし傍点が第 1 の修訂版に引き継がれ、それが第 2 の修訂版に至って誤字に変化ないし脱落したとする解釈もまた可能である。

2.3 60 巻本修訂版 2 版の関係 (2) —— 100 巻本との関わり

100 巻本との関係が 60 巻本の 2 つの修訂版の関係を知る手がかりになる可能性がある——前稿における 50 巻本の各版の関係の考察には 60 巻本との関係が役に立った——。そのような考えから、表 2 として示した文字の正誤の対応表に 100 巻本の原刊版と修訂版に関する情報を加えてみると表 4 のようになる。

複雑な様相を呈している 100 巻本修訂版については後に考えることとして差し当たり無視すると、大半の事例において 100 巻本原刊版の文字は誤字——「軀逐」「約束」「挿盟誓死」

表4 『海国図志』60巻本3版と100巻本2版における文字の正誤の対応

	60巻本						100巻本					
	巻	葉	行	原刊版	修訂版1	修訂版2	原刊版	修訂版	巻	葉	行	
A1	1	36b	7	駆逐	駆逐			駆逐	2	2b	7	
	34	13b	2〜3	奸究	奸究			奸究	52	1b	3	
		20a	1〜2	約束	約束			約束		8a	1〜2	
	35	31b	3	久	人			53	31b	3		
	36	17b	5	三千三百五十八	三十三百五十八			三千三百五十八	55	2b	5	
	38	17a	7	歃盟誓死	挿盟誓死			58	6a	7		
17b		6	英軍	英車			英軍		6b	6		
A2	1	20b	8	湖中	湖申	湖中			1	20b	8	
		57b	9	公司	公其	公司				23b	9	
	12	8a	2	復東	後東	復東		後東	17	8a	2	
	35	7b	4	回帆徑去	回軌徑去	回帆徑去			53	7b	4	
		9b	7	而	面	而				9b	7	
	36	12a	6	多氷雪	多氷雲	多氷雪			54	28a	6	
			7	道光九年	道光力年	道光九年					7	
		18b	8	土番	土悉	土番		土悉	55	3b	8	
		21a	4	七千五百	七千五而	七千五百				6a	4	
		24a	7	改用	改男	改用				9a	7	
		30a	5	恐生内患	殺生内患	恐生内患		殺生内患		15a	5	
	6		即裏海	海裏海	即裏海			6				
38	13a	5	西北界	面北界	西北界			58	16a	5		
	19a	7	嶼上	與上	嶼上				4a	4		
B1	35	1a	8	欧ϕ巴			欧羅巴			53	1a	8
	37	4b	9	奴匈			匈奴			56	4b	9
B2	1	37b	2〜3	荷蘭西			仏蘭西		荷蘭西	2	3b	2〜3
	34	17b	6	為土			為上			52	5b	6
			8	聞看			開看					8

など——を含めて60巻本修訂版2に一致していることが分かる。例外的に、A1類に含まれる「奸究」と「英軍」およびB1類に含まれる「欧羅巴」と「匈奴」は60巻本修訂版2に一致していないが——60巻本修訂版2ではそれぞれ「奸究」「英車」「欧ϕ巴」「匈奴」と書かれている——、それらはいずれも誤字を訂正した形になっている。したがって、60巻本の2つの修訂版はやはりここで仮定している新旧の関係にある、すなわち、100巻本原刊版は60巻本修訂版2に基づいて編まれ、その際誤字の一部が訂正された——と考えれば、いちおうの解釈は得られる。

傍点の有無について確かめてみても、表5に見る通り、100巻本原刊版は60巻本修訂版2のそれに近い。

しかしながら、以上のような100巻本原刊版との関係を確かめても、60巻本の2つの修訂版がここで考えている新旧の関係にあると確実に言えるわけではない。もし2つの修訂版

表5 『海国図志』60巻本3版と100巻本2版における傍点の有無の対応

	位置 (60巻本、100巻本共通)				文字	60巻本			100巻本	
	巻	葉	行	高さ		原刊版	修訂版1	修訂版2	原刊版	修訂版
A1		2b	1	21	其	有	無			
		5a	7	7	前					
		5b	2	13~14	棄定					
A2	1	1a	5	2	戦	有	無	有	有	
				8	者				無	
		2a	2	2	港				有	
				9	艘				有	
		4a	4	20	里				無	
		5a	3	2	戸				有	

の関係が逆であったとしても、100巻本原刊版は60巻本の最初の修訂版に基づいて編まれたと考えれば、以上に見てきた事実はいずれも問題なく説明できるからである。

考慮に値する可能性があるほかの要素の1つは、内框郭の寸法である。100巻本の原刊版の内框郭の縦横の寸法は、表6に示す通り、60巻修訂版1ではなく60巻修訂版2のそれに一致する。

表6 『海国図志』60巻本3版と100巻本2版の内框郭の寸法⁷

		内框郭の寸法
60巻本	原刊版	20.1cm×13.7cm
	修訂版1	17.0cm×12.5cm
	修訂版2	17.3cm×12.2cm
100巻本	原刊版	17.3cm×12.2cm
	修訂版	16.4cm×12.1cm

また、60巻本の2つの修訂版の残存件数の差にも着目する価値がある。すなわち、上述の通り修訂版2は残存が少ない。それは、修訂版1が印刷され流通したあとで修訂版2が作られたが、その後間もなく100巻本が出版されたために修訂版2は多くは出回らなかったということだと考えれば整合的な解釈が得られる。

とは言え、内框郭の寸法も残存件数も60巻本の2版の関係に関する単なる状況証拠であるにとどまる。

結局のところ、60巻本の2つの修訂版の新旧は残念ながら確実に判定することができないという結論とせざるを得ない。今は、両版はおそらくここで述べた関係にあるだろうという不確実な推定の形で言えるだけである。

⁷ 内框郭の寸法は巻一の1aによる。框郭は完全無欠の四角形であるわけではないので、寸法は若干の曖昧さを伴う。

2.4 60 卷本 3 版の出版年

60 卷本の原刊版と修訂版1 では扉の見返しにそれぞれ「道光丁未仲夏」「道光巳酉夏」と書かれている。それを疑うべき理由はないので、それぞれの出版年は 1847（道光 27）年、1849（道光 29）年であったと考えるのが穏当であろう。

修訂版2 も見返しの内容は修訂版1 と共通であるが、同一年に 2 種類の版が出版されたと考えるより、より大きな時間差をもって出版されたと考えるほうが自然である。とすれば、100 卷本原刊版の出版年がその見返しの刊記によれば 1852（咸豊 2）年であるので、60 卷本修訂版2 の出版年は 1850（道光 30）年か 1851（咸豊 1）年のいずれかであった可能性が高いことになる。そして、その残存件数の少なさを考え合わせれば、60 卷本修訂版1 と 60 卷本修訂版2、60 卷本修訂版2 と 100 卷本原刊版とでは出版時期の隔たりが后者では小さかったと考えられる。以上のような考慮に基づき、60 卷本修訂版2 の出版年は 1851（咸豊 1）年であった可能性が相対的に高いと考えられる。⁸

2.5 100 卷本修訂版に関わる新たな問題

60 卷修訂版に 2 つの版があることが判明したことに伴って、前稿で決着が付いたはずであった本来版の系譜をめぐって新たな問題が生じる。表 4 に見る通り、100 卷本修訂版は 100 卷本原刊版で正しく書かれていた A2 類の「復東」「土番」「恐生内患」と B2 類の「仏蘭西」をやめて、60 卷本修訂版1 に誤って書かれた「後東」「土悉」「殺生内患」「荷蘭西」に変更している。これはいったい何を意味するのであろうか。60 卷本の修訂版1 と修訂版2 の関係、あるいは、100 卷本の原刊版と修訂版の関係を見直さなければならないということであろうか。

しかし、100 卷本修訂版が 100 卷本原刊版に基づいて編まれていることはやはり確実である。前稿で根拠を示して述べた理解を見直す必要があるとは考えられない。そして、目下の問題は、2 つの 60 卷本修訂版の相互関係を見直すことによって解決が付くわけでもない。60 卷本修訂版の一方における各種の誤字が 100 卷本原刊版を飛び越して 100 卷本修訂版で再び出現する形になっているからである。

では、60 卷修訂版1 の誤字が 100 卷修訂版に至って復活するということがいかにしてあり得るのであろうか。

この問題を考えるうえでまず注意すべきは、100 卷本修訂版は表 4 に見るすべての事例に

⁸ 本小論の関心の外に位置する問題であるが、日本で出版された『海国図志』諸本のうち、注 6 に記した塩谷世弘と箕作阮甫による付訓本は 60 卷本修訂版1 に基づいている。それら以外の諸本の底本は未確認である。頼子春訓点『海国図志 印度国部』（1856（安政 3）年）は見かけ上は塩谷と箕作による付訓本に似るが、原本の誤記に関わる注記がいずれの修訂版ともかみ合わない。未知の第 3 の修訂版があったか、さもなくば、『海国図志』の原本ではなく写本が底本にされたのであろう。

ついで 60 巻本修訂版1 の誤字に戻しているわけではなく、多くの事例では 100 巻本原刊版の正字が使われているということである。すなわち、60 巻本修訂版2 での訂正——具体的には A2 類の「湖中」「公司」「回帆徑去」その他と B2 類の「為上」「開看」——と 100 巻本原刊版での訂正——A1 類の「奸宄」「英軍」、B1 類の「欧羅巴」「匈奴」——は 100 巻本修正版に継承されている。

以上のような複雑で一見不可解な状況が生じた経緯に関する筆者の推理を述べれば次の通りである。すなわち、100 巻本修訂版は原稿が完成したあと、60 巻本修訂版1 を用いた校訂が行われた。⁹ その際、校訂者はすべての字句を 60 巻本修訂版1 に合わせたわけではなく、変えないほうがよいと考えた場合は原稿の通りとした。例えば、「奸宄」と「奸究」、「道光九年」と「道光力年」、「改用」と「改男」とでは 100 原刊版に書かれたそれぞれの前者が正しいことが明白であるので、60 巻本修訂版1 の誤字に合わせることはしなかった。その一方で、校訂者が原稿の表現が正しいという確信を持てなかった事例については修訂版1 を信頼してその表記に合わせた。

100 巻本修訂版のうちにも実は部分的な文字の修正の有無に関わる異版があるのであるが、そのうち京都大学文学研究科図書館蔵本（東洋史）における B2 類の「開看」（開いて見る）の「開」——60 巻本の原刊版と修訂版1 では誤って「聞」と書かれ、100 巻本原刊版で「開」に訂正された——は、注目すべきことに、校訂者の介入と、その後の段階における校訂者もしくは別の点検者の介入をその字形にとどめている。

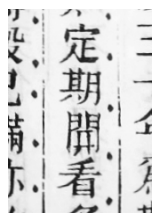


図2 『海国図志』100 巻本修訂版（京都大学文学研究科図書館蔵本（東洋史））の「開看」

図2に見る「開」の字形は、明らかにまず「聞」と書かれ、後にそれを「開」に変更したものである。校訂者が 100 巻本原刊版の「開」という正字を一度 60 巻本修訂版1 に従って「聞」に書き換え、それに基づく板刻が行われた後で、校訂者か別の点検者が「開」のほうが正し

⁹ 60 巻本によって校訂するにしてもなぜ修訂版2 でなく修訂版1 が使われたのかは不明である。おそらく校訂者は 60 巻本修訂版に 2 つの版があることも、そして、修訂版1 には誤字が多いことも知らなかったのであろう。

いと考えて再び変更したものと考えられる。¹⁰

3 『海国図志』 本来版諸版の系譜

前稿と本稿における考察に基づいて推定される『海国図志』本来版諸版の系譜、継承関係を図式化して示せば図3のようになる。推定による出版年を括弧に入れて付記する。60巻本修訂版1と100巻本修訂版とを結ぶ矢印付きの線は上述の校訂によって生じた部分的な継承を示す。

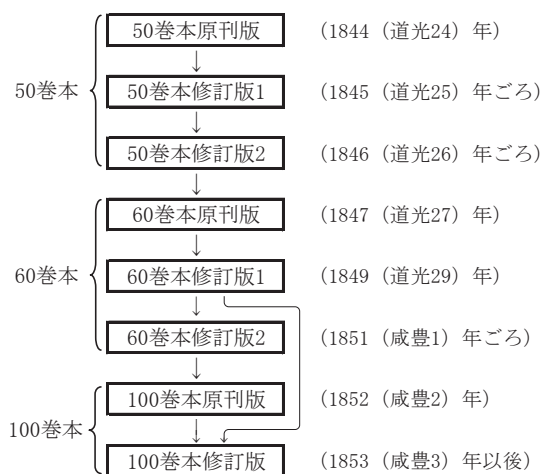


図3 『海国図志』 本来版諸版の継承関係

筆者の確認することのできた『海国図志』本来版8種類の概要を一覧できる形に整理すれば表7——前稿に掲げた表を増訂したもの——のようになる。魏源没後に出版された100巻本重刊版に関する情報も併せて示す。

4 『海国図志』 重刊版の版問題

表7に示した7種類の『海国図志』100巻本重刊版について字句の異同を探てみると、非常に複雑な対応の状況にあることが分かる。表8は局限された範囲に関する観察の結果の一部である。60巻本の3版および100巻本の原刊版と修訂版に関する情報とともに示す。

¹⁰ 筆者の確認できた100巻本修訂版のうち京都大学文学研究科図書館蔵本(東洋史)以外の諸本では「開」が変形のない整った字形で書かれている。当該字が新たに彫り直されたのであろう。

表7 『海国図志』本来版一覧（附 100巻本重刊版）

	巻数	種別	序文		見返し		出版年 (推定)	確認した本
			標題	年	内容	年		
本来版	50巻本	原刊版			道光甲辰仲夏 古微堂聚珍板	道光24年 (1844年)	1844年	上海図書館蔵甲本(請求番号 線普長3604)、上海図書館蔵乙本(請求番号 線普長421301-20)
		修訂版1	道光22年 (1843年1月)				1845年ごろ	愛知大学図書館蔵本、関西大学図書館蔵本(序文なし)、京都大学人文科学研究所蔵本、湖南図書館蔵本(40冊、扉なし)、湖南図書館蔵本(16冊、扉、序文なし)、島根県立図書館蔵本
		修訂版2	海国図志叙		不明		1846年ごろ	秋田県立図書館蔵本(扉なし)、和泉市久保惣記念美術館蔵本(扉なし)、華東師範大学図書館蔵本(扉なし)
	60巻本	原刊版			道光丁未仲夏 古微堂鈔板	道光27年 (1847年)	1847年	鹿児島大学附属図書館蔵本、萩市立萩図書館蔵本(序文なし)、成文出版社刊影印本(1967年)
		修訂版1	道光27年 (1847年)		道光巴酉夏 古微堂重訂	道光29年 (1849年)	1849年	京都大学経済学研究科・経済学部図書館蔵本、京都大学文学研究科図書館蔵本、国立公文書館蔵本(第1冊なし)、上海図書館蔵本
		修訂版2					1851年ごろ	京都大学人文科学研究所蔵本、湖南図書館蔵本
重刊版	100巻本	原刊版	海国図志原叙 海国図志後叙	咸豊2年 (1852年)			1852年	関西大学図書館蔵本、京都大学人文科学研究所蔵本、神戸大学附属図書館社会科学部系図書館蔵本、中央大学図書館蔵本
		修訂版		咸豊2年 (1852年)	咸豊壬子年 古微堂重刊定本		1853年以後	京都大学文学研究科図書館蔵本(地理、東洋史)、国際基督教大学図書館蔵本、国立国会図書館蔵本、東京大学東洋文化研究所図書館蔵本
		重刊版1	重刊海国図志序 (陳善圻)				1868年 またはそれ以後	大阪府立中之島図書館蔵本
		重刊版2	海国図志原叙 海国図志後叙	同治7年 (1868年)	同治丁卯 郴州陳氏重刊本	同治6年 (1867年)	またそれ以後	上海図書館蔵本
		重刊版3						
		重刊版4	重刻海国図志叙 (左宗棠)		光緒二年 平慶涇固道署重刊	光緒2年 (1876年)	1876年 またはそれ以後	京都大学法学部図書館蔵本、国立公文書館蔵本、早稲田大学図書館蔵本
		重刊版5	海国図志原叙 海国図志後叙	光緒1年 (1875年)			1895年ごろ	京都大学文学研究科図書館蔵本(後附続集)、北京大学図書館蔵本(後附続集)
		重刊版6						
		重刊版7			光緒六年 邵陽急当翁新鈔	光緒6年 (1880年)	1880年 またはそれ以後	京都大学吉田南総合図書館蔵本(重刻海国図志叙なし)
								愛知大学図書館蔵本、大阪大学附属図書館蔵本、一橋大学附属図書館蔵本

凡例・注

- 1) 100巻本に関しては、序文の年の欄には最新の序文に記された年を記している。具体的には「海国図志後叙」、重刊版では「重刊海国図志序」「重刻海国図志叙」である。
- 2) 出版年は序文に記された年のみならず見返しに記された年にも必ずしも一致しない(前掲4.3)。
- 3) 重刊版1～2は扉は異なるが、本文の差異は確認できていない。
- 4) 重刊版3～5は表に記した情報(の限り)ではほぼ共通であるが、すべて異なる木版によって印刷されている。重刊版6～7についても同様である。
- 5) 重刊版5を小字による印刷に付した『増広海国図志』は省いた。『増広海国図志』は筆者の確認の範囲には1895(光緒21)年の上海書局版と1898(光緒24)年の文賢閣版がある。両者は扉は異なるが、本文の差異は確認できていない。

各版名の下に小字で添えている数値は内框郭の寸法である——記入スペースの関係でここでは単位を mm としている——。

表 8 100 巻本重刊版における文字、表現の対応¹¹

	卷 (60巻本/ 100巻本)	葉	行	60巻本			100巻本							備考
				原刊版 201×137	修訂版1 170×125	修訂版2 173×122	原刊版 173×122	修訂版 164×121	重刊版1 167×121	重刊版2 165×121	重刊版3 159×112	重刊版4 未確認	重刊版5 159×112	
A	1/1	1a	1	卷之一					卷一					
	25/38	2b	5	尚不好潔					尚白好潔					
	35/53	3a	6	海国聞見録					海岸聞見録					
	48/77	22a	7	愛倫	受倫					愛倫				アイルランド
B	12/17	3a	2	六七十人			六七千人	六七十人			六七千人			
C	叙/原叙	4b	7～8	「原刻～」あり			なし			あり			なし	
D	37/56	6a	2	以北	以此	以北	以此			以北			以此	
E	12/17	8a	2	不復東	不後	不復東	不後東			不復東		不漢東	不復東	
F		11b	9	長甲			長崎				長崎	長崎		
G	25/38	2b	6	魯河河		魯河水		魯羅河					ドウロ(Douro)川	

ごく大まかに言えば、100 巻本の重刊版1と重刊版2は100 巻本修訂版との類似性が高いのに対し、重刊版3以下の諸版はそれらとは区別される類を成しているらしいことが分かる。実際、重刊版3以下の諸版の多くは左宗棠による序文「重刻海国図志叙」を有するという点においても共通している。また、内框郭の寸法の点で見ても、100 巻本原刊版は60 巻修訂版2に近いが、その後は100 巻本修訂版と同重刊版1～2がほぼ同等の類を成し——高さが若干縮小されている——、同重刊版3～7がそれとは異なる類を成している——高さ、幅ともにさらに若干縮小されている——。

ただし、重刊版6には「重刻海国図志叙」がない——もともと、それは筆者の調査した特定の本に関わる問題かも知れない——、重刊版7にはむしろ100 巻本修訂版と重刊版1～2の類に共通する要素もあるなど状況は複雑で、重刊版の系譜の解明は未解決の課題として残さざるを得ない。

¹¹ 表中のCに言う「原刻～」の有無については前稿の4.2.2で詳しく述べたところであるが、その概略は次の通りである。

60 巻本の序文「海国図志叙」は50 巻本の同題の序文を引き継いだものであるが、末尾に「原刻僅五十巻今増補為六十巻道光二十七年載刻于揚州」（原刻僅かに50 巻、今増補して60 巻と成し、道光27年揚州にて刻す。）という増補に関する説明が追加されている。100 巻本原刊版は60 巻本の「海国図志叙」を「海国図志原叙」として引き継ぎ——そして、新たな序文を「海国図志後叙」として加えている——、「原刻～」の説明も文面を若干調整したうで残しているが、100 巻本修訂版ではその「原刻～」が削除された。しかし、表8に見る通り、100 巻本重訂版3では「原刻～」が復活している。

5 『海国図志』の異版の種類

最後に、『海国図志』の多数の版の観察を通じて得られた認識を記しておく。それは、『海国図志』の版の異同は複合的な概念だということである。すなわち、2つの本の版が異なると言うとき、粗く分類しても4種類の場合がある。

第1の最も明確な異版は、新たな文献からの引用の追加を含む大幅な編集を施すことによって作られたものである。本来版で言えば、50巻本から60巻本、60巻本から100巻本への改版がこれに該当する。

第2の種類の異版は、既存の版の内容のままで——と言っても、小規模な語句の変更や誤字の発生などを伴い得るが——活版ないし木版を作り直すことによって作られたものである。本来版の50巻本、60巻本、100巻本の内部における異版はおおむねこれに相当する。重刊版3と重刊版4、重刊版6と重刊版7もおそらくそのような関係にある。ただし、60巻本の原刊版と2つの修訂版とでは語句の変更の規模がやや大きく、その意味において第1の種類の異版に若干近い。

第3の種類の異版は、扉の1葉だけを差し替え、それ以外は既存の活版ないし木版をそのまま使って作られたものである。確かなことを言うにはしかるべき確認を要するが、100巻本修訂版、重刊版1、重刊版2の3版はそのような関係にある可能性がある。50巻本原刊版の2点の上海図書館蔵本——前稿3.1——も同様であるかも知れない。

第4の種類の異版は、差異が以上のいずれの種類の異版の場合よりもさらに微小であるものである。すなわち、既存の活版ないし木版を使いつつ、一部の誤字などを修正することによって作られたものである。『海国図志』100巻本修訂版に「開看」の「開」の字形に関して異なる2版があることを先に見たが、それが一例である。異版と言えば異版であるが、このようなものまで異版に数えれば版の種類が大幅に増えてしまう可能性がある。しかも、完全に同じものであるように見えるいかなる2つの本であってもどこかに差異がある可能性があるので、版の同一性を確実に判定することができなくなってしまう。結局のところ異版の定義の問題に帰着するが、小規模な修正による異版は異版ではなく同一の版の変種として扱うのが適当かも知れない。

注意すべきは、4種類の異版のあり方は“異なりの程度”のような一次元的な尺度上にはないということである。第1と第4の種類の異版については異なり度がそれぞれ最大、最小であると言えるが、第2と第3の種類の異版でどちらがより大きく異なっているかということは無条件に言うことはできない。多数の葉の活版ないし木版が作り直されているという点において前者のほうが実質的に大きく異なっていると言えるが、扉が作り直され、見返しの内容も異なるという点に着目すれば後者のほうが大きく異なっていることになる。

6 おわりに

長年『海国図志』の本来版には50巻本、60巻本、同修訂版、100巻本の4つの版があると考えられてきたが、調査によって実際には少なくとも8つの版——50巻本、同修訂版1、同修訂版2、60巻本、同修訂版1、同修訂版2、100巻本、同修訂版——があることが明らかになった。重刊版にも少なくとも7つの版がある。

従来の研究においては常にもっぱら序文と扉の見返しの記述に基づいて版の異同が判断されてきた。しかし、そのような方法で『海国図志』の版に関する事実を正確に把握することはできない。しばしば序文や見返しの内容を変えることなく新しい版が作られたからである。またそれとは逆に、見返しの記載は変えるが、扉の1葉以外は古い活版ないし木版を使うという方法によって新版が作られることもあった。そのような状況であるから、『海国図志』の版の問題を考える際には、序文や見返しの記載のみに頼らず、扉から本文に至る資料全体を多面的に観察、分析することが不可欠である。

それにしても、従来未知の版区別の発見が意味するところは単なる版の数の訂正にとどまらない。それは、関連した問題をも提起する。従来、歴史研究者によって、『海国図志』は当初発行部数が非常に少なく、重刊版に至ってようやく社会に普及したかのように言われ続けてきた。しかし、50巻本以来かくも多くの版が作られたということは、それだけ需要があったということであるはずである。各版の段階でどれくらいの部数の『海国図志』が印刷され、流通したのか。そして、それが中国社会でどのように受容されたのか。『海国図志』の歴史は、長年にわたって関心と議論の対象とされてきたが、なお解明の余地を多く残す問題である。

文献

田野村忠温(2023)「『海国図志』版問題新論—従来未知の版区別の発見とその含意—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第63巻

The Revision History of *Haiguo Tuzhi* Revisited:
Versions of the Sixty-Volume Edition and Related Issues

Tadaharu TANOMURA

In an earlier article of the author concerning the revision history of Wei Yuan's *Haiguo Tuzhi* (Tanomura (2023), written in Japanese), it was shown that contrary to the commonly held view there in fact exist, within the range of the versions published while Wei Yuan was alive, three versions of the fifty-volume edition and two versions of the one-hundred-volume edition.

This article will demonstrate that there exists a hitherto unknown version distinction with regard to the sixty-volume edition of *Haiguo Tuzhi* as well, and consider a problem, posed by the discovery, which involves the succession relationship among the versions of the sixty-volume edition and the versions of the one-hundred-volume edition.

Haiguo Tuzhi was repeatedly republished for nearly half a century after Wei Yuan died. In the final sections of this article, it will be argued briefly that the number of those post-Wei Yuan versions also exceeds the number which has been known, and that there are different types of version distinction, which fact needs to be taken into consideration when thinking about the issue of the editions and versions of *Haiguo Tuzhi*.

Reference

Tanomura, Tadaharu (2023) 'A new theory of the revision history of *Haiguo Tuzhi*: Identification of versions hitherto undistinguished and its implications,' *Memoirs of the Graduate School of Letters, Osaka University*, Vol. 63.

Keywords: Wei Yuan, *Haiguo Tuzhi*, the sixty-volume edition, the post-Wei Yuan versions